近代の日本画と能の関係について

The Relationship between Modern Japanese Painting and Noh

人文科学系／美術史／論文

デザインコース
河村　珠美
Tamami Kawamura

◉研究の目的

能を絵画化する行為は、能が成立した室町時代よりさかんに行われてきた。本稿は能の絵画の中でも、近代の日本画家が能からインスピレーションを受けて描いた作品に着目した。それぞれの画家と能との関係の調査および作品の分析により、画家が自らの表現のために能をどのように活用しているか探ることを目的とする。

◉能の歴史および能に関する絵画の歴史

能は成立期より各時代の権力者に保護され、また利用されてきた。その一方で、庶民には「謡曲」というかたちで物語部分のみが広く親しまれてきた。

また、能を描いた絵画資料は6種類に分類されることがわかった。このうち能・狂言の舞台を描く「能絵」とよばれる絵画は、江戸期を通じて画題の一つとして定着した。しかし、その多くは粉本に則って描かれたため、図柄が似通っていた。こうした絵画以外に、小林健二氏が「一般の画家が能からインスピレーションを得て自らの表現に取り入れた絵」の存在を指摘しており、これらは取り上げる場面や構図、色、線描など表現が画家によって異なっていた。

◉作品の分析

国立能楽堂では、平成27年(2015)度より毎年2月に＜近代絵画と能＞を月間特集としてきた。近代の著名な画家が画題として描いた能を上演し、その絵画作品とともに鑑賞しようとするものだ。本稿では初年度から令和4年(2022)度までの同公演で取り上げられた23点の作品を分析した。これらは確実に能を題材にしているものと、能と題材が共通している歴史画であり能を参考にしたかどうか定かでないものがある。そこで第2章では、前者の作品を描いた7名の画家を「能との関わりが深い画家」と仮定し、画家と能との関係の調査および作品の分析を行った。つづく第3章では、後者の作品を描いた7名の画家を「能との関わりが薄い画家」と仮定し、同様に調査および分析を行った。作品の分析には、同時代の能画家による能画および江戸時代の能絵との比較を行い、また題材となった古典文学を照合した。

◉結果

分析の結果、能の絵画作品は「能の物語を絵画化したもの」と「能舞台を描いたもの」に大別できた。能の物語を絵画化したものは、周囲の景物の微細な描写や能絵にはない構図など、画家独自の表現が見られた。一方で、表情や衣装に能舞台の要素を取り入れたもの、あるいは能絵の定番の構図を用いたものもあった。ただしいずれの表現も、画家が伝えたい部分を効果的に見せるために用いられていた。また能舞台を描いたものは能絵の一つと捉えることもできるがが、モチーフの取捨選択や役者のスケッチをもとに描くなど、画家の創意工夫が見られるという点で能絵とは異なっていた。

さらに、能と題材が共通する歴史画にも、一部の作品に謡曲あるいは能舞台との共通点が見られたため、こうした作品も能を参考にして描かれた可能性が考えられる。

(左) 能の物語を絵画化した例1:上村松園《花がたみ》
(右) 能の物語を絵画化した例2:下村観山《熊野観花》

(左) 能舞台を描いた例1:前田青邨《出を待つ》
(右) 能舞台を描いた例2:小林古径《松風》

◉結論

本研究を通じて、近代の日本画家たちは能を描く上で、能の物語を描いたもの、能舞台を描いたものに関わらず、それぞれが最も強調したい部分を効果的に見せるために能舞台の要素を利用し、あるいは意図的に能舞台と異なる表現をしていることがわかった。能との関わり方は画家によって異なり、また強調する要素も、主人公の感情、能そのものの幽玄美、あるいは物語のテーマなど様々であるため、表現に多様性が生まれたといえる。